

## 『丸ごと』ということ

浜田 竜之介

今、東京農工大学では一般教育部をつくりかえて、人間自然科学部というものをつくろうという考えがすすめられている。それを実施するために作成された文書のひとつに、どのような授業科目があり、その内容がどのようなものかということが書いてあるものがある。

これを読んでいる時、「オヤ」と思う文章にぶつかった、それはある文学関係の授業科目の説明の中で文学のことを述べた一節である。あまり正確にはおぼえていないが、その内容は次のようなことだったと思う。

「文学とは生の人間を丸ごととらえようとするものである。丸ごとというのが大切で・・・」

ずい分、丸ごとと思入れのある書き方だなと僕は思った。誰が書いたのかどこにも書いてない。しかし大体の見当はつく。

あるお酒の席で——といっても僕はお酒はのまないが——この人が例の文章を書いた人だな、と思う人をつかまえることができた。その人は秋山駿という人である。

「実は、あなたが書かれたであろうと思う文章の中で、あの『丸ごと』という言葉がとても気になつていのですが・・・」と僕はきりだした。この時の彼の反応を適確に表現することは僕の能力を超える仕事である。しかし、「そうか、あなたは、あそこから何かを感じてくれたか・・・」というふうな答えが返ってきたように思う——少しそれは僕の思いすごしかもしれない——。そして、色々と僕の思ってもいなかったことを次から次へと話してくれた。

それを要約すると次のようになる。まず、「日本のように、文学が私小説が中心である場合には本来『丸ごと』という考えがでてくる素地がない」ということである。それでは、どのような場合に『丸ごと』がでてくるのかということだが、それは「西欧のように社会性を強く意識した小説を生み出すような背景のあるところでは、文学の

存在意義についてもっと積極的に主張しようとすることになる。そのような場合に、自然科学との対決姿勢をもって文学の存在意義の主張をしようとする。」「その対決姿勢のよりどころとなるのが『丸ごと』なのである。」ということだ。

その結果、生の人間をより深く理解し、とらえようとするれば、丸ごととそれを行うことのできる文学以外にはそのようなことができるものはない、ということになる訳である。

上述のような、文学をやっている人の考えの背景の中には、自然科学は非『丸ごと』であるという前提がある。確かにここ300年ほど自然科学の主流はそうであったようだ。

しかし、自然科学の流れの中にも、あちこちに『丸ごと』は頭をもたげている。1900年代初期に展開をはじめたエコロジーやペドロロジーはその思考や組立てに『丸ごと』という考えが組みこまれているように思う。ランダムハウス—小学館の英和辞典で『丸ごと』にあたるholismという語をひくと、J. C. Smutsが唱えたとあり、Books in PrintsでSmutsをみると彼の著書Holism and Evolutionという書名をみつけることができる。それは1926年に出版され、その再版が1973年にでていることを教えてくれる。生物学の分野でこのような考えがあるということ、1926年に出版されたものが1973年にまた出版されたということも実に興味あることである。

1942年にはDürkenの「全体性と生物學」という訳本が日本で出版されている。この最後のところには「個人というのはとるにたらない存在で国家こそが・・・」ということが書いてあり、全体主義の暗い時代を思いおこさせる部分もある。

ついこの間には、お茶の水女子大学の大学院の人にDictionary of Human Geographyのholismのところに地理学の分野ではregionsの研究にholismの考えが使われると書いてあるということを教えてもらった。（東京農工大学）